

2021年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

21. 栄光

【三】 次のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

- | | | | | |
|-----------|----------|----------------|---------------|----------------|
| 13 | 10 | 7 | 4 | 1 |
| 入学をイワう。 | シフクを肥やす。 | 母のキヨウリは岩手県である。 | ザッシを毎月買っている。 | エンガンで漁業を営む。 |
| 14 | 11 | 8 | 5 | 2 |
| ほめられてテれる。 | ムネが苦しい。 | ヨウジ教育にかかわる。 | 店のカンバンをかたづける。 | 台風で屋根がハソンした。 |
| 15 | 12 | 9 | 6 | 3 |
| 締め切りをノばす。 | セーターをアむ。 | 親族のケイズを調べる。 | ユウビン局で葉書を買う。 | 被災地にトイレをカセツする。 |

- 問五 傍線部④「滝本君！」と声をかけられたことで、朔は境界の存在に気づきます。この後の文中に、境界が視覚障がい者一般に対して必要な配慮を示している箇所があります。そのふるまいが描かれた一文を抜き出し、最初の五文字を答えなさい。(字数には句読点等もふくみます。)
- 問六 傍線部⑤「じゃあ、これも食べてみる？」とありますが、「じゃあ」の部分で、その内容がはっきりするように、分かりやすく言い換えなさい。

【一】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。(1) 16は段落番号を表しています。

1 未来のことを考えるのは、とても心が躍る楽しいことです。たとえば、月に住むことができるだろうか、とか、リニアモーターカーの次の世代の乗りものはどんなものだろう、とか、スカイツリーよりも高い建てるのはいつ、どうやってできるだろうか、とか、がんを根治する薬はいつできるのだろうか、とか、とてもワクワクしますね。

2 でも、食べるという行為が今後どのように変わっていくのか、そんな未来の予想はあまりなされません。「食べもの」は、「乗りもの」や「建てるもの」と比べて地味な印象があるかもしれませんが。あるいは、人間は食べないと生きていけないから、そんなに変えることはないのでは、と思う人もいるでしょう。けれども、食べものの未来を考えることも、とくに若い人たちにとってはとても重要です。なぜなら、未来が自分たちの望むとおりに変化してくればよいのですが、必ずしもそうではない可能性があるからです。

3 たとえば、こんな未来だっと思って思い描くことができます。一日一回、小さな食べものを食べて、それで一日分の栄養補給ができるという世の中です。ある食品会社の広報部の方が、池袋の本屋さんでのトークショーのあと、わたしにこんなことを教えてくださいました。これさえ食べられれば一日の栄養を賄える食品を開発したけれども、いざ試食をしてみると、とてもまずかったです。ただし、①これを理想だと考える人がいることも事実です。知人から聞いたのですが、ある集まりで、食べる体験をヴァーチャルリアリティなどの力を借りて、できるだけリアルにしようと考えている人が、その目的として「食べるという煩わしいことから人間を解放するために」と言ったそうです。食べることが「煩わしい」と考える人がいることに、わたしはとても驚きました。そして、この話を聞いて気づきました。もつと仕事をするためには、もつと経済成長するためには、ご飯の時間を削って働いてくれたほうがよい、と考える人には、こうした技術が完成するのはありがたいことなのかもしれない。人間が食べる時間を節約できれば、もつと人類の文化芸術の発展に役立つと考える人にとっても、やはり素晴らしい話なのかもしれません。食べることが数秒で終わってしまう未来。その代わり、食べる時間を、映画、読書、ショッピングなど、別の楽しいことに充てることができる未来。みなさんはいかがでしょう。

4 ②わたしは食べることをやめて、もつと勉強時間を増やす、とか、人類の文化をより高尚なものにするとかいうことには大きな疑問を感じる人間です。

5 なぜかといいますと、一つは、食事みたいな楽しいことが人びとの暮らしからなくなってしまうのは、もつたいたいと思うからです。この楽しみを失ってまで到達すべき高尚な文化などあるのでしょうか。たしかに、わたしだって、食べることを忘れて仕事に没頭することもあります。だけれども、その仕事が終わったあとに食べるご飯はまた格別のおいしさです。わたしが単純に食いしん坊だけなのかもしれませんが、こんなに楽しいことがなくなるなんて、とてもつらいことだと思います。現に病気で食べることが難しくなって元気がなくなる人はたくさんおられます。

6 ③言語聴覚士という仕事をしている古くからの親友がこんなことを教えてくれました。鳥取の病院で働く彼は、病気になってご飯を飲み込むことが難しいお年寄りにつきそって、ご飯を嚙んで飲み込むためのお手伝いをしています。彼が言うには、胃に穴をあけて、そこからご飯を流し込む「胃ろう」という装置にするよりも、頑張つて口からご飯を食べられるようになったときの患者さんはいつともより生き生きとしていた、と。それで彼は、ギターを持って高齢者のまえで歌をうたったりしながら、いい雰囲気をつくることにも労力を割いたと聞いて、自分はいいい友だちをもったな、と、とても感激しました。食べることは、実は、人間が人間であるための根源的な行為だと思うのです。けれども、こういう未来はほとんど現実化しています。(注2)サプリメントの誕生や、(注3)プロテインバーなどの携帯食の発達です。ちなみに、『戦争がつくった現代の食卓―軍と加工食品の知られざる関係』(アナスタシア・マークス・デ・サルセド著、白揚社、二〇一七年)という本に書いてありますが、プロテインバーは、アメリカの軍人のために軍隊が開発したもので、戦争と密接に関わっている食品であることを補足しておきましょう。7 二つ目に、こんな未来も描けるかもしれません。できるだけ早く食事が済むように、おいしい味や香りのするムースやゼリーがどんどん開発され、売られていく、という未来です。これだと、手軽だし、消化も早く、胃腸への負担も少なくなつてよいかも、と思う人もおられるかもしれません。実際に、現在、すぐに食べられるゼリー食品は薬局やコンビニなどで安く手に入ることがができます。

8 実は、こうした未来は、すでにアメリカで求められて来しました。日本語で『家政学の間違い』(ローラ・シャピロ著、晶文社、一九九一年)と訳された英語の歴史書があります。

9 この本は一九八六年に出版され、現在も読み継がれています。わたしも『ナチスのキッチン』という本を書くとき、参考にした本です。一九世紀から二〇世紀にかけての世紀転換期で料理の合理化、効率化が進んでいくという内容。アメリカで、胃腸の消化を助けるために、今後はできるだけ細かく刻んでドロドロとした、嚙む時間があまり必要ないレシピを開発すべきだ、と

いう考えが、一九世紀に流行したと書かれてあります。この考えは一定の評価を得て、流動食のような食べものが普及するのを助けました。

10 歯ぐたえをなくす動きです。実は、こうした流れもすでにあります。歯ぐたえのある食べものは嫌われるようになり、噛み切りやすいもの、すぐに飲み込めるものが求められています。それがもつと進んでいくと、食べものはすべてゼリーやムースになつてしまうかもしれません。

11 ここで思い出すのは、いまから五〇年前の一九六八年、アメリカで公開された映画『二〇〇一年宇宙の旅』です。この映画では、「ハル」という名前の人工知能のようなものが宇宙船の全システムを制御しているのですが、いま見ても本当に面白いです。この映画に、宇宙旅行中に宇宙食を食べるシーンがあります。無重力状態で食べものが浮かないように、さまざまな色彩のムースみたいな食べものがプラスチックの皿にくっついていて、それをスプーンで削ぎ落として食べるのです。お世辞にもおいしそうとは言えませんが、白くてさっぱりとしたツルツルの宇宙船の船内のイメージにぴったりとあっていました。実は、この食事は、NASA（アメリカ航空宇宙局）が映画製作のために独自に開発したものだつたようです。みなさんはいかがでしょう。

12 食べものから噛みぐたえがなくなっていく未来。わたしは望ましいものではないと思います。噛むということは、飲み込むことでは得られない栄養を体内に取り込むために必要な行為であります。わたしはもつと重要な意味合いがあると思います。人間は給油される自動車ではありません。できるだけスムーズに栄養が体内に注入されることは、人間を自動車にするようなものだと思っています。しかし、人間は噛みます。脳内に血が巡ります。しかしそれだけではありません。噛むと食事中に時間が生まれます。この時間が、食事に、「共感覚」、つまり「同じ場所に・ともに・いる」気持ちを生み出すのです。^③この遠回りの行為が、給油のように直接消化器官に栄養補給しないことが、人間を人間たらしめているように思えます。たとえば、食材である生きものやそれを育ててくれた農家や漁師のみなさん、あるいは、料理をしてくれた人に対して感謝の気持ちをもつことも、人間ならではの感覚だと思ふのです。

13 食べものが一日一回で済むクッキーのようなものになること、栄養素満点のゼリーやムースになること。どちらの未来もすでに進行中の話です。では、以上の二つの未来とは違った未来はどのように描けるでしょうか。これをみなさんと一緒に考えていきたいのですが、そのまえにわたしの考えていることを少しお話させてください。

14 それは、歯ぐたえがあつて、おいしい食べものが、全部無料になる未来です。いまは、食べものの流通は一部の企業によってコントロールされており、そうである以上、そんなことは絶対に不可能だ、と言う方もおられるでしょう。しかし、実は実現できないこともない、というのがわたしの実感です。というのも、実際に、わたしの家の近くの中華料理屋では、皿洗いを手伝え代金は無料になります。もちろん、使用済みのお皿を何枚も洗わなければなりませんから「タダ」ではありませんが、それでもお金に困ったときにこういうお店があると、ちよつとほつとするような気持ちになるのはわたしだけでしょうか。最近「子ども食堂」といって、夜に家族とご飯を食べることができない子どもたちが自由に入って、信じられないくらい安い値段でおいしい食事をすることができます。かならずしも無料ではありませんが、自由に入って食べられる空間は、いたるところに出てきています。

15 インドのシク教徒の寺院には、足を洗い、頭にターバンを巻けば、宗教、性別、^{（注1）}門地、国籍を問わず、誰でも入れる無料食堂があります。だいたいナンとカレーですが、寺院のヴォランティアと職員さんが、毎日カレーをつくり、無償で提供しています。現在、食糧はつくりすぎの傾向にあり、企業や国の倉庫で眠っています。こんな食堂が世界中に広がれば、その食糧をそこで利用するだけで飢餓はかなり減らせることができます。二〇一六年の国連の統計では、現在飢餓の状態にある人は八億一五〇〇万人と言われ、増加傾向にあるとされています。地球上の一パーセントが飢えているのです。

16 もちろん、その半分以上は紛争地帯ですから、^④戦争を止めることが飢えをなくすために必要です。それは、とても困難な歩みです。ただ、宗教や国籍を問わないで誰でも受け入れる無料食堂の試みは、そういった歩みの難しさをちよつとずつ軽減してくれるように思います。

（藤原辰史『食べるとはどういうことか』）

（注1）言語聴覚士＝言語や聴覚、食べものの飲みこみに関する障がいがある人に対して、指導や支援をする資格を持つ人。

（注2）サプリメント＝健康の維持増進に役立つ成分を濃縮し、錠剤やカプセル状にしたもの。

（注3）プロテインバー＝タンパク質を主にふくんだ棒状の食品。

（注4）門地＝家柄。

問一 傍線部①「これ」とありますが、「これ」の指している内容はどのようなことですか。

問二 傍線部②「わたしは食べることをやめて、もつと勉強時間を増やす、とか、人類の文化をより高尚なものにするとかいうことには大きな疑問を感じる人間です。」とありますが、筆者がそのように言うのはなぜですか。本文中の言葉を使って答えなさい。

問三 傍線部③「この遠回りの行為」とありますが、それはどういうことですか。解答欄に合うように二十字以内で答えなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問四 傍線部④「戦争を止めることが飢えをなくすために必要です。」とありますが、筆者は「戦争を止める」以外に、どうするかで「飢え」を減らせると考えていますか。

問五 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食べものの未来について人々が真剣に考え始めたなかで、特に若者が食事に関心を持つことは重要である。
イ ゼリーやムースは、アメリカの軍人のために独自に開発された、戦争と密接なつながりを持つ食品である。
ウ 現在コンビニで安く入手できるゼリー食品と、十九世紀にアメリカで普及した流動食とは、無関係である。
エ 『二〇〇一年宇宙の旅』のために開発された宇宙食は、食事から歯ごたえをなくす流れの一つの例である。
オ 大企業による流通のコントロールを利用しさえすれば、食べものを無料で提供することは実現可能である。

問六 この文章を五つの段落にまとめるとすると、次のどの組み合わせがよいですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
イ	1	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ウ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	16
エ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	16
オ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	16
カ	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	16

【二】 次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

朔は高二の冬、高速バスの事故にあつて視力を失った。同じバスに乗っていた弟の新は軽傷ですんだものの、兄の失明に責任を感じ、将来を期待されていたマラソンをやめた。ケガの治療後、盲学校で過ごしていた朔は、一年ぶりに帰宅し、ガールフレンドの梓を通じて新がマラソンをやめたことを知る。

「本当に大丈夫なの？ お母さん、車で送ってあげようか」

昨日から何度も同じことを繰り返す母親に、いい加減、朔も閉口した。

「もしなにかあつたら」

「母さん、オレいくつだと思つてんの？ アズも一緒なんだし、心配ないから」

朔がため息をつく横で、梓は笑顔を見せた。

「おばさん、この時間なら電車も混んでないし、絶対に無理はしませんから」

梓が言うと、加子は大きく息をついた。

「それじゃあ気を付けてね。そうだ、向こうに着いたら電話してちょうだ」

「母さんっ」

「わかったわよ。梓ちゃんよろしくお願いね」

「はい」

「じゃあ、行ってくるから」

「気を付けてね」

はいはいと頷きながら朔は注1白杖を手にして玄関のドアを押した。

朔が家に戻って一ヵ月になる。これまで、近所の店や公園に出かけることはあつたけれど、電車を使つての外出は今日が初めてだ。

「母さん、まだこっち見てるんじゃない？」

まさか、と振り返った梓が「わっ」と声を漏らした。

「さすが朔、お見通しだね」

「二十年近く、息子をやってるんで」

なるほどーと、うなる梓に朔は苦笑した。

最寄駅から東京行きの快速に乗ると、梓は朔の腕を引いて座席に座った。

「空いててよかったね」

顔を向けると、朔は①さつきより少しやわらいだ表情をしていた。

外を歩くときの朔は、口数も少なく、表情もかたい。隣を歩いていても、緊張しているのがわかる。

「平日の昼間だからなあ」

「でも少し時間がずれると、けっこう学生がいるよ」

話しながら梓が正面に顔を向けると、前の座席に座っている中年の女が白杖に視線をとめて、朔を見ていた。梓がその女を見返していると、ふいに目が合い、女はまばたきをしながら視線をそらして目をつぶった。

「どうかした？」

「え？ ううん。それよりいまから会う人って、盲学校の先生なんでしょ？」

「境野さんね。先生じゃなくて、月に一、二度学校に来る人」

「ボランティアさん？」

「そんな感じ」

②ふーん、と曇った返事をする梓に「ん？」と朔が首を傾げると、梓は肩をあげた。

「だったら、もう少し気を遣ってくれたっていいのに」

「気を遣う？」

「最寄駅まで来てくれるとか」

梓は窓の外に目を向けた。

「それは、違うんじゃないかな」

「えっ？」

「だってオレから連絡して、都合つけてもらってるわけだし」

「それはそうかもしれないけど」

梓の不満げな声に朔は鼻をこすった。

「アズは、オレが視覚障がい者だから、境野さんは気を遣うべきだって思ってるんじゃない？」

③梓は朔を見て、視線をさげた。

「オレは嬉しかった。境野さんが新宿でつて言ってくれて」

「……………」

「て言っても、結局アズに迷惑かけちゃってるんだけど」

「迷惑なんて思っていないよ」

「うん……。ありがとう」

「ありがとうとかもない。ふたりで出かけるのって久しぶりだし、わたしだって嬉しいし」

梓が言うと、朔は柔らかに口角をあげた。

三十分ほどして新宿駅に着いた。車内は空いていたけれど、新宿駅は平日の日中でも大勢の人が足早に行きかっている。

ホームに降りた途端、発車を知らせるメロディーや構内放送、行きかう人の足音に話し声……。あらゆる音が洪水のように朔の耳に流れ込んできた。白杖を握る手が汗ばむ。ずっと息を吸い、白杖を握り直したとき、うしろからどんと誰かが肩にぶつかった。

バランスを崩す。一瞬、朔は立っている方向を見失った。

「朔、大丈夫？」

梓の手を背中に感じて首肯したけれど、声が出なかった。前から横からうしろから、あらゆる方向に人が行きかう。へたに白杖を動かすとはじかれそうになる。梓は朔の左腕をつかんでびたりとからだを寄せた。

「エスカレーター、点検中だ。階段で行くけど」

「大丈夫」

階段の前で梓が足を止めると、うしろの男が舌打ちして抜かしていった。足の裏で丸い点字ブロックをとらえる。

「手すり持ったほうがいいでしょ」

梓が右側に移って背中^へに手を当てた。

階段の高さや幅^{はば}を白杖で確かめて、朔は足を上げた。わきが汗ばみ、呼吸が浅くなる。

「あともう少し」

梓の声の直後、手すりが水平になり足元にまた点字ブロックを感じた。

梓が左側に立つと、朔は反射的に梓の腕をつかんだ。

新宿駅は何度も利用したことのある駅だ。ホームから改札口までの構造もだいたい頭に入っている。そのつもりだったのに、立っている方向がわからなくなった途端、すべてが飛んだ。

「ごめん」

「なに？」と首を傾げる梓に、ううん、と朔はかぶりを振った。

待ち合わせの店は、駅から徒歩五分ほどのところにあるカフェだった。

入り口のドアを開けると、カラコロンとカウベルが音を立て、珈琲^{コーヒー}の香ばしい匂^{にお}いがした。

「④ 滝本君！」

店の奥^{おく}から声が聞こえると、朔はほつと息をついて声のほうにからだを向けた。梓が同じほうに顔を向けると、窓際^{まどぎわ}の席で四十歳^{よっし}くらいの細身の男が右手をあげていた。

「元気そうだね」

「境野さんも」

「なんとかね。えっと、彼女^{かのじょ}は？」

境野は梓のほうに目をやって、どうもと笑^えみを浮かべた。

「上城梓^{かみしろ}です。初めまして」

「こんにちは。なんだ滝本君は彼女いたのか。ちつともそんな話しないからさ」

「聞かれてませんし、言いませんよ、わざわざ」

朔は苦笑した。

「まあ座ろう。ここの珈琲美味^{おい}いんだよ。滝本君、珈琲好きだろ。上城さんはなににする？」

境野はメニューを広げて梓のほうに向けた。

「じゃあ、わたしも同じもので」

境野は珈琲を三つ注文すると、「水の入ったグラスは正面、その左におしぼり置くよ」と、グラスを朔の前に、左側におしぼりを置いた。

「どうも」と朔はグラスに手を伸ばして、口を湿^{しめ}らせると顔をあげた。

「それで、電話でお話したことなんですけど」

「ああ、^{注2}ブラインドマラソンのことだね」

「やってみたいんです、オレ」

「えっ！」

梓の声に、境野が驚^{おどろ}いたように顔をあげた。

「あ、すみません。ちよつとびっくりしちゃって」

そう言っ梓はちらと朔を見た。

お待たせしました、とウエートレスが珈琲カップをテーブルにのせて向こうへ行くと、朔は背筋を伸ばした。

「スポーツって小学校の頃^{ころ}にやってたくらいで、走るのも得意じゃないし、正直言うと体力とか自信ないんですけど」

境野はうんうんと頷いて、イスの背からからだを離^{はな}した。

「体力云々^{うんぐん}っていうのは気にしなくてもいいと思うよ。そんなのはトレーニングしていけば自然とついていくしね。それにマラソンっていったっていきなり四十二・一九五キロ走らなきゃいけないなんてことはないんだから。大会にしたってハーフもあるし、五キロとか十キロなんていうレースもあるから。僕^{ぼく}としてはランナーが増えてくれるっていうのは嬉しい」

小一時間ほど話をしたあと、境野は一足先に店を出た。梓は苺のパフェを追加で注文してから、視線をあげた。
「新ちゃんのため？」

「ん？」

「ブラインドマラソン」

「そういうわけじゃないよ」

「じゃあどういうわけ？」

朔は水滴のついたグラスに指を当てた。

「べつに。なにか始めてみたいと思つて」

「でも、走るの好きじゃないでしょ。なにか始めてみたいっていうのは、わかるんだけど、マラソンって朔っぽくないよ」

「だからだよ」

「だから？」

そう、と朔はひと言言つて冷めた珈琲を口に含んだ。

「いままでのオレとは違うことをしてみたいんだ。どうせ始めるなら、見えていたときのオレなら絶対にしていなかったことをしたい」

「……………」

お待たせしました、とウエートレスがパフェを運んできた。

梓は生クリームをスプーンですくつて、いたずらそうな笑みを浮かべて朔の顔に近づけた。

「⑤じゃあ、これも食べてみる？」

甘いクリームの匂いに朔は苦笑した。

「それはいいや」

「なーんだ、つまんない」と梓はクリームをぱくりとした。

(いとうみく『朔と新』)

(注1) 白杖＝視覚に障がいのある人が歩行する際、使用する白い杖。

(注2) ブラインドマラソン＝視覚に障がいのある人が走るマラソン。

(注3) マッチング＝組み合わせること。

(注4) レクチャー＝説明。

問一 波線部a「閉口した」、b「おずおずと」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「閉口した」

b「おずおずと」

ア 疲れ果ててしまった

ア ごく自然なふるまいで、さりげない様子

イ 飽き飽きしてしまった

イ おそろおそろ、ためらいながら行動する様子

ウ 怒りで心を閉ざした

ウ あわてず、ゆつくりと静かにふるまう様子

エ あわれみの情がわいた

エ 気になることがあつて、落ち着かない様子

オ 困り果ててしまった

オ 納得のいかないことがあつて、不満げな様子

問二 傍線部①「さつきより少しやわらいだ表情をしていた。」とありますが、それはなぜですか。

問三 傍線部②「ふーん、と曇った返事をする」とありますが、ここから梓のどのような気持ちを読み取れますか。

問四 傍線部③「梓は朔を見て、視線をさげた。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分が朔のことを、手助けしてあげなければならない対象として見ていたことに気がついて、気まづくなったから。

イ 盲学校のボランティアであるならば障がい者を深く理解するべきだと決めつけていたことを、恥ずかしく思つたから。

ウ 久しぶりの二人きりの外出であるのに、自分がもちかけた話題で暗い雰囲気になつてしまつたと、後悔したから。

エ ボランティアの境野の方が自分よりも良き理解者であると朔が考えていることが分かり、がっかりしているから。

オ 自分が朔のことを思つて発言した意見に対して、批判的なことを言ってくるので、じわじわと憎しみを感じたから。

2021年度

入学試験問題

国語

50分

1. 受験番号・氏名を解答用紙に書くこと。
2. 受験番号は算用数字で書くこと。(例:123)
3. 鉛筆などの筆記用具・消しゴム以外は使わないこと。
4. 用紙を立てて見ないこと。
5. 質問(印刷不明のところだけ)のある場合、鉛筆などを落とした場合、トイレに行きたくなった場合、気持ちが悪くなった場合は、だまって手をあげること。
6. 解答用紙のみ回収します。

21. 栄光

【三】 次のカタカナの部分に漢字に直しなさい。

- | | | | | | |
|----|----------------|----|----------------|----|----------------|
| 1 | エンガンで漁業を営む。 | 2 | 台風で屋根がハソンした。 | 3 | 被災地にトイレをカセツする。 |
| 4 | ザッシを毎月買っている。 | 5 | 店のカンバンをかたづけける。 | 6 | ユウビン局で葉書を買う。 |
| 7 | 母のキヨウリは岩手県である。 | 8 | ヨウジ教育にかかわる。 | 9 | 親族のケイズを調べる。 |
| 10 | シフクを肥やす。 | 11 | ムネが苦しい。 | 12 | セーターをアむ。 |
| 13 | 入学をイワう。 | 14 | ほめられてテれる。 | 15 | 締め切りをノばす。 |

問五 傍線部④「滝本君！」と声をかけられたことで、朔は境界の存在に気づきます。この後の文中に、境界が視覚障がい者一般に対して必要な配慮を示している箇所があります。そのふるまいが描かれた一文を抜き出し、最初の五文字を答えなさい。(字数には句読点等もふくみます。)

問六 傍線部⑤「じゃあ、これも食べてみる？」とありますが、「じゃあ」の部分で、その内容がはっきりするように、分かりやすく言い換えなさい。

受験番号

氏名

評点

【一】

問一

問二

問三

問四

問五

問六

【二】

問一

a

b

問二

問三

問四

問五

問六

【三】

11	6	1
12	7	2
む		
13	8	3
う		
14	9	4
れる		
15	10	5
ばす		